シンポジウム

11 月 13 日（木） 08:40 ～ 10:40 第 1 会場（国立京都国際会館 Annex1）

シンポジウム 1

[S1] 周産期環境要因と精神疾患発症メカニズム研究の最近の進歩

座長：岩本 和也 熊本大学大学院生命科学研究部分子脳科学講座
前川 素子 東北大学大学院医学系研究科

本シンポジウムでは、胎児発育や脳神経発達に影響を及ぼす周産期環境要因の分子メカニズムに焦点を当て最新の研究成果を共有する。前川素子氏（東北大）は DOHaD 仮説を基に低栄養条件と統合失調症との関連性を解説する。長谷耕二氏（慶応大）は母体腸内細菌叢が胎児発育に及ぼす影響を議論し、岩本和也氏（熊本大）は母体免疫活性化が脳神経発達に及ぼすゲノム・エピゲノム基盤を紹介する。那波宏之氏（和歌山県立医大）は周産期サイトカインが統合失調症発症に関与する分子基盤を解説する。また、一戸紀孝氏（NCNP）は胎児期環境要因が自閉症スペクトラム症の分子病態を修飾するメカニズムについて解説する。これらの講演を通じ、周産期環境要因と精神疾患発症の因果関係解明に向けた新たな視点を提供する。

S1-1 DOHaD 仮説に基づく妊娠期低栄養モデルと統合失調症との関連について

前川 素子 東北大学大学院医学系研究科

S1-2 母体腸内細菌が胎児発達に与える影響

長谷 耕二 慶應義塾大学薬学部

S1-3 母体免疫活性化と脳神経発達過程のゲノム・エピゲノム基盤

岩本 和也 熊本大学大学院生命科学研究部分子脳科学講座

S1-4 周産期のサイトカインストームによる皮質神経回路変換；統合失調症との関係性

那波 宏之 和歌山県立医科大学

S1-5 胎児期環境リスク・多遺伝子リスク・エピゲノム制御の収束がもたらす自閉症分子サブタイプ――グリアファースト型病態の統合的検証

一戸 紀孝 国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 微細構造研究部

11 月 13 日（木） 08:40 ～ 10:40 第 4 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-1）

シンポジウム 2

[S2] 精神疾患の生物学的定量評価の臨床応用の最前線

座長：根本 清貴 筑波大学医学医療系医療情報マネジメント学・精神医学
松本 純弥 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

精神疾患の診断や治療において、客観的な生物学的指標の重要性は広く認識されているものの、研究と臨床の間には依然として大きな隔たりが存在してきた。しかし近年、従来の隔たりを打破するような新しい定量評価手法の研究開発成果が出てきている。本シンポジウムでは、臨床での実用化に近づいている、あるいはすでに実装されている生物学的な定量評価手法について議論する。具体的には、通常診療で撮像される MRI から側脳室容積を自動計測するシステム、タブレット端末を用いた眼球運動および認知機能の定量評価手法、安静時機能的 MRI によるうつ病の客観的診断支援、そしてアミロイド PET におけるセンチロイドスケールの臨床応用について報告する。本シンポジウムを通じて、研究成果としての客観的な生物学的指標を実臨床にいかに還元し、精神疾患を有する患者の適切な診断・治療に結びつけていくかについて今後の展望を議論したい。

S2-1 臨床応用可能な側脳室容積バイオマーカーの開発

根本 清貴 筑波大学医学医療系医療情報マネジメント学・精神医学

S2-2 タブレットを用いた眼球運動と認知機能の測定

森田 健太郎 東京大学医学部附属病院リハビリテーション部

S2-3 安静時機能的 MRI によるうつ病の客観的診断支援

岡田 剛 広島大学大学院医系科学研究科 精神神経医科学

S2-4 アルツハイマー病診断と治療におけるアミロイド PET の役割

松田 博史 日本医科大学健診医療センター /
一般財団法人脳神経疾患研究所南東北創薬・サイクロトロン研究センター

11 月 13 日（木） 08:40 ～ 10:40 第 5 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-2）

シンポジウム 3

[S3] 気分障害における認知機能障害をターゲットとする介入研究の動向

座長：住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部

吉村 玲児 産業医科大学医学部精神医学講座

双極症あるいはうつ病患者において、気分症状の改善後に残存する認知機能障害が、治療後の社会機能的リカバリーを阻害するとされる。こうした中、日常診療で施行可能な認知機能評価法の整備が本邦でも進み、気分障害における認知機能障害 (CIMD) の治療への期待が高まっている。本シンポジウムでは、CIMD への複数の介入法（薬物、リハビリテーション、低侵襲脳刺激）各々における最新のエビデンスを、第一線で CIMD 治療研究に携わる、若手を含む国内各地の専門家（医師、心理士）に、以下のテーマで紹介いただく。

・双極症とうつ病における認知機能障害に対する薬物治療の動向
・うつ病臨床における認知機能障害～現状と課題～
・うつ病の機能レベル回復に向けた認知リハビリテーションの有効性
・うつ病におけるセットシフティングに与える経頭蓋直流刺激の効果

以上を踏まえ、CIMD 克服の展望、および実臨床場面で当該治療を実施する際の課題について議論する。

S3-1 **気分障害における認知機能障害への気づきと対応：新規治療法の開発 / 日常診療への実装に適した評価法とは？**

住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部

S3-2 **うつ病臨床における認知機能障害～現状と課題～**

前嶋 仁 順天堂大学医学部附属静岡病院メンタルクリニック

S3-3 **うつ病の認知機能の評価と関わり：薬物療法や精神療法ができること**

菊地 俊暁 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S3-4 **大うつ病性障害における認知的柔軟性の障害と tDCS による介入の可能性：セットシフティングに着目して**

越川 陽介 関西医科大学医学部精神神経科学講座

11 月 13 日（木） 13:10 ～ 15:10 第 1 会場（国立京都国際会館 Annex1）

シンポジウム 4

[S4] 数理と臨床の共創による精神疾患サブタイプのヒト病態メカニズム解明

座長：小池　進介　東京大学大学院医学系研究科精神医学分野
平野　羊嗣　宮崎大学医学部臨床神経科学講座精神医学分野

AMED 脳神経科学統合プログラムでは、基礎と臨床の連携やアカデミアと産業界の連携の強化により、脳のメカニズム解明等を進めるとともに、数理モデルの研究基盤（デジタル脳）を整備し、画期的な診断・治療・創薬等シーズの研究開発を推進している。そこで本シンポジウムでは、数理科学と臨床精神医学の共創によって精神疾患サブタイプのヒト病態メカニズムを明らかにすることを目的としたチームを紹介する。具体的に、本チームの全体構成と 10,000 計測に及ぶ精神疾患ヒト多階層データベースの進捗を紹介したあと、ヒト脳 MRI、臨床脳波、網羅的エピゲノム解析、思春期コホート経時的質問紙の、各階層データを用いた数理解析を、各専門領域の若手研究者より発表し、今後の多階層数理解析に向けた展望を議論する。最終的に、基礎神経科学とも議論を重ね、双方向トランスレーショナル研究への進展や、大規模多階層データベースの利活用を期待する。

S4-1 課題名「数理と臨床の共創による精神疾患サブタイプのヒト病態メカニズム解明」の概要

小池　進介　東京大学大学院医学系研究科精神医学分野

S4-2 富山大学における精神症多階層データ収集体制とマルチモーダル脳 MRI 解析

笹林　大樹　富山大学学術研究部医学系神経精神医学講座 / 富山大学アイドリング脳科学研究センター

S4-3 統合失調症の異質性と治療反応

中島振一郎　慶應義塾大学医学部精神・神経科

S4-4 安静時脳波に基づく統合失調症サブタイプ分類とサブタイプ別分子基盤の解明

田村　俊介　宮崎大学医学部臨床神経科学講座精神医学分野

S4-5 思春期発達におけるエピゲノム変動の縦断解析

柳田悠太朗　熊本大学大学院生命科学研究部分子脳科学講座

S4-6 コロナ禍での抑うつを地形図として解釈する

立松　大機　名古屋大学

11 月 13 日（木） 13:10 ～ 15:10 第 4 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-1）

シンポジウム 5

[S5] 痒い所に手が届く精神科の臨床 Hack

座長：堀　　輝　福岡大学医学部精神医学教室
嶽北　佳輝　関西医科大学医学部精神神経科学講座

今回の企画は、2023・2024 年の臨床精神神経薬理学会で大盛況となったシンポジウム「明日から使える実臨床における向精神薬使用の新常識」をベースに、日々試行錯誤されている医師に向け、実際に行われている工夫などインターネットの検索では出てこないような情報を紹介いただき、読者に「明日から試してみよう！」と思っていただけるシンポジウムにできればと考えております。

S5-1 エビデンスと現場をつなぐ「適応外処方」の実際

古郡　規雄　獨協医科大学精神神経医学講座

S5-2 向精神薬の服用回数について

吉田　和生　慶應義塾大学病院臨床研究推進センター

S5-3 高齢者診療における臨床 Hack

馬場　　元　順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院メンタルクリニック /
順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学

S5-4 トラゾドン・ミアンセリン・ヒドロキシジンの使いどころ

竹内　啓善　慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室

S5-5 妊婦・授乳婦に寄り添う精神科薬物療法～周産期の安心を支えるために～

菊地　紗耶　東北大学大学院医学系研究科 精神神経学分野

11 月 13 日（木） 13:10 ～ 15:10 第 5 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-2）

シンポジウム 6

[S6] せん妄の薬理学的予防介入とその実現のための精度の高い予測診断の開発

座長：八田耕太郎　順天堂大学医学部附属練馬病院
金沢　徹文　大阪医科薬科大学

せん妄の臨床は、多方面からの研究の進展によって 10 年前とは全く異なり、さらに進化しようとしている。特に、せん妄の薬理学的な予防について、メラトニン受容体作動薬は最新のメタ解析で有効性が示され、オレキシン受容体拮抗薬は治験で部分的にしろ有効性が示されている。このように薬理学的な予防が現実的になるにつれ、せん妄発症を予測することの意義は大きくなり、さらに精度の高さが求められるようになっている。本シンポジウムではまずせん妄の薬理学的な予防研究の現在までの到達点を概説し（順大・八田）、臨床情報を基にした AI アプリ（日本医大・岸, NCC・小川）や簡易脳波計（阪大・畑, 大阪医薬大・西澤）によるせん妄発症予測研究の進捗状況を報告し、せん妄の新たな病態機序としての Epigenetics 仮説（鳥取大・山梨）も含めて、臨床現場を変えつつある研究を紹介しながら、さらに 10 年先を展望したい。

S6-1　せん妄の薬理学的予防介入研究の現状

八田耕太郎　順天堂大学医学部附属練馬病院

S6-2　ＡＩによるせん妄予測：ＩＣＵにおける術後せん妄予測

岸　泰宏　日本医科大学武蔵小杉病院精神科 / 医療法人岸会岸病院

S6-3　臨床情報を基にしたせん妄発症予測の試み

小川　朝生　国立がん研究センター東病院

S6-4　ポータブル脳波デバイスを用いた機械学習による心臓血管手術後せん妄の発症予測モデルの開発

畑　真弘　大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室

S6-5　BSEEG（Bispectral EEG）を用いたせん妄の予後予測：1077 症例の解析から見えた展望

西澤　由貴　大阪医科薬科大学

S6-6　せん妄のエピジェネティクス研究

山梨　豪彦　鳥取大学医学部 脳神経医科学講座 精神行動医学分野

11 月 13 日（木） 16:40 ～ 18:40 第 1 会場（国立京都国際会館 Annex1）

シンポジウム 7

[S7] 精神科と脳神経内科の融合領域の疾患・症候

座長：高橋 良輔 京都大学総合研究推進本部
高橋 英彦 東京科学大学大学院医歯学総合研究科 精神行動医科学

医学の進歩に伴い精神科と脳神経内科の融合領域が広がっている。例えば統合失調症と考えられていた病態の中に自己免疫脳炎が潜んでいる可能性が指摘される一方、レヴィ小体型認知症をはじめとする認知症や神経変性疾患ではうつ、幻覚などの精神症状に対する対応が不可欠である。さらに心因性と考えられてきた機能性神経疾患の脳神経科学的背景も解明が進んでいる。このような現状に鑑み、精神科と脳神経内科の融合領域のトピックスについて我が国の第一線で活躍する専門家にご講演いただく。

S7-1 機能性神経障害の診療：21 世紀の新潮流

園生 雅弘 帝京大学医療技術学部 / 帝京大学脳神経内科

S7-2 精神医学と脳神経内科学の境界領域としての気分障害：バイオマーカーが示す連続性

高畑 圭輔 国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構 / 慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室

S7-3 統合失調症の解明のための神経疾患的病態研究アプローチ

塩飽 裕紀 東京科学大学大学院 精神行動医科学分野

S7-4 精神疾患の病態モデルとしてのレビー小体病

西尾 慶之 大阪大学

11 月 13 日（木） 16:40 ～ 18:40 第 3 会場（国立京都国際会館 本館 B1F Room E）

シンポジウム 8

[S8] 統合失調症薬物治療ガイドライン 2027：進捗報告

座長：竹内 啓善 慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室
指定発言：笠井 清登 東京大学大学院医学系研究科精神医学
橋本 亮太 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所

日本神経精神薬理学会および日本臨床精神神経薬理学会が策定する統合失調症薬物治療ガイドラインは、5 年ごとの改訂を目指している。前回の改訂版は 2022 年に出版されており、次回の改訂版は 2027 年の出版を目標としている。これに向けて、2024 年 9 月よりガイドライン改訂作業が開始された。本シンポジウムでは、ガイドライン作成の体制、Patient and Public Involvement（PPI）体制、Clinical Question（CQ）の作成を含め、現在までの進捗状況について報告する。

S8-1 精神科診療ガイドラインの意義と課題：エビデンスと個別性の調和に向けて

尾崎 紀夫 名古屋大学 大学院医学系研究科 精神疾患病態解明学

S8-2 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 作成秘話

堀 輝 福岡大学医学部精神医学教室

S8-3 統合失調症薬物治療ガイドラインの普及・実装の取り組み（EGUIDE を中心に）

坪井 貴嗣 杏林大学医学部精神神経科学教室

S8-4 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 に対する当事者・ご家族のご意見 ~ アンケート調査を通して ~

嶽北 佳輝 関西医科大学医学部精神神経科学講座

S8-5 統合失調症薬物治療ガイドライン 2027：進捗報告

竹内 啓善 慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室

11 月 13 日（木） 16:40 ～ 18:40 第 4 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-1）

シンポジウム 9

[S9] 海外研修 / ポールヤンセン賞 数年後の報告

座長：内田 裕之 慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室
鈴木 健文 山梨大学医学部精神神経医学講座

本シンポジウムでは、日本臨床精神神経薬理学会のポールヤンセン賞または海外研修生制度に選抜された経験を持つ 5 名の先生方にご登壇いただき、受賞後の研究、キャリア、そして現在考えていることについて自由に語っていただく。各先生がどのような挑戦を経て成果を上げ、どのようにキャリアを築いてきたのかを共有することで、参加者にとって新たな視点や刺激を得る機会となることを目指す。また、本学会の若手研究者支援の意義についても再確認する場となる。本シンポジウムは、特に若手研究者にとって、キャリア形成や研究の方向性を考える貴重な機会となることを期待しており、多くの若手研究者にぜひ参加してもらいたい。

S9-1 Johns Hopkins 大学への海外研修で得たもの～経験に勝る財産なし～

酒本 真次 岡山大学学術研究院 医歯薬学域 精神神経病態学

S9-2 CNP 海外研修員に選抜されて得られた（お金以外の）もの

谷 英明 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S9-3 精神疾患をめぐるいくつかのテーマへの取り組み
― 生物・心理・AI を通して ―

梅原 英裕 徳島大学キャンパスライフ健康支援センターアクセシビリティ支援部門

S9-4 2019 年にポールヤンセン賞 数年後の報告

岩田 祐輔 山梨大学医学部附属病院 精神神経医学講座

S9-5 向精神薬の副作用軽減を目指した薬理ゲノム学研究

齋藤 竹生 藤田医科大学精神神経科学

11 月 13 日（木） 16:40 ～ 18:40 第 5 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-2）

シンポジウム 10

[S10] 日本の精神科治験の現状と治験に必要なモノとコト

座長：岸　太郎　藤田医科大学
石郷岡　純　浜野ホスピタル

本邦では、1997 年「医薬品の臨床試験の実施の基準に関する省令 (GCP)」の制定により、治験の実施には厳しい管理が求められ、治験実施医療機関ではそれを支援する Clinical Research Coordinator (CRC) の配置や、Site Management Organization (SMO) からの CRC の活用により、支援体制の基盤が構築されつつある。一方、精神科においては他の診療科に比べ、その展開が遅れている現状がある。これは、1）多くの精神科治験では急性増悪期・安定期の患者へのプラセボ対照試験であり、実施の難易度が高いこと、2）細心の注意を払う症状の評価には時間が掛かり、医師や被験者の負担も大きいことなどが理由として考えられる。さらに、国際共同試験が増え、海外と比較して、時間やコストが掛ることや、予想された有効性が示せないことから、ドラッグラグ・ロスが進んでいる。この問題を解決する糸口を探るために、精神科治験に必要なモノやコトとは何かを、治験を計画、実施、支援、評価するそれぞれの立場のエキスパートの先生方と議論を深めたい。

S10-1 精神科治験実施の留意点と結果の解釈
― うつ病治験の医学専門家の立場から ―

加藤　正樹　関西医科大学 医学部 精神神経科学講座

S10-2 精神神経疾患領域における開発の動向と臨床試験の特徴について

池澤　聰　独立行政法人 医薬品医療機器総合機構

S10-3 精神科治験の「進まなさ」を生む現場の実情

藤田　潔　桶狭間病院藤田こころケアセンター

S10-4 精神科治験の質を高める“コト”と“モノ”：
SMO（Site Management Organization）の現場支援から見える課題と展望

後藤　美穂　日本 SMO 協会 / トライアドジャパン株式会社

S10-5 精神科治験の未来を拓く：国際競争力強化と日本の治験改革最前線
― 世界とともに、くすりを一日でも早く患者さんへ ―

星野真一郎　日本イーライリリー株式会社 研究開発・メディカルアフェアーズ統括本部
臨床開発本部

11 月 14 日（金） 08:40 ～ 10:40 第 1 会場（国立京都国際会館 Annex1）

シンポジウム 11

[S11] 希少変異遺伝子から見える精神疾患の脳内メカニズム

座長：廣井　昇　UT Health San Antonio, Department of Pharmacology
中澤　敬信　東京農業大学生命科学部

精神疾患メカニズムに基づいた創薬や治療法確立（precision medicine）は未だ実現していない。遺伝子変異の精神疾患要因としての位置は議論の余地がないが、ヒトにおける特定遺伝子の同定には問題点がある。精神疾患における高浸透率の遺伝子変異はケース数が少ないため、統計的にリスク因子として確立することが困難である。しかしながら、これらの希少変異遺伝子はその高浸透率ゆえに、精神疾患の生物学的メカニズム解明への信頼性のある起点となりえる。このシンポジウムは浸透率の高い単一遺伝子の希少変異 (AUTS2, MECP2, POGZ, SCN2A, TBX1) に基づいたマウスモデルあるいは細胞モデルにおける最先端データを議論する。これらの遺伝子の変異によって惹起される脳内変異は precision medicine のターゲットになるだけでなく、他の遺伝子変異に因る精神疾患あるいは特発性精神疾患治療への応用も期待される。

S11-1 AUTS2 遺伝子と神経発達

星野　幹雄　国立精神神経医療研究センター神経研究所

S11-2 自閉スペクトラム症と関連する POGZ 遺伝子座のリスクバリアントに関する病態解析

中澤　敬信　東京農業大学生命科学部

S11-3 レット症候群モデルにおける皮質ネットワーク異常

石田　綾　理化学研究所 脳神経科学研究センター

S11-4 Oligodendrocytes: A Key Player of Neuroplasticity in the Developing Brain(Insights from oligodendroglial Scn2a deletion in an ASD Mouse Model)

Jun Hee Kim　University of Michigan

S11-5 Deficiency of Tbx1, a gene encoded in 22q11.2 Copy Number Variation, impairs social and cognitive behaviors by altering brain shape and neonatal stem cells

廣井　昇　UT Health San Antonio, Department of Pharmacology

11 月 14 日（金） 08:40 ～ 10:40 第 4 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-1）

シンポジウム 12

[S12] アルツハイマー型認知症の新薬を考える

座長：伊賀 淳一 愛媛大学大学院精神神経科学講座
服部 信孝 順天堂大学大学院医学研究科 神経学

アルツハイマー型認知症およびその前段階である軽度認知障害（MCI）の病態解明は大きく進展しており、それに伴い新薬の開発も加速している。最近では、ドナネマブが 2024 年 11 月承認、レカネマブが 2023 年 9 月承認、ドネペジル経皮吸収型製剤が 2022 年 12 月承認、ブレクスピプラゾールは 2024 年 9 月に、「アルツハイマー型認知症に伴う焦燥感、易刺激性、興奮に起因する、過活動又は攻撃的言動」対する適応が新たに追加された。これらの新しい治療選択肢の登場は、アルツハイマー型認知症の治療に携わる精神科医にとって喜ばしいことである。しかし、その一方で、治療効果や副作用について患者やその家族に説明する際に悩む場面も少なくない。そこで本シンポジウムでは、これら 4 つの薬剤について精神科医の立場から、それぞれの薬剤の特徴や、患者およびその家族にとってのメリット・デメリットを、エキスパートが詳しく紹介する。

S12-1 Donanemab について考える

嶽北 佳輝 関西医科大学医学部精神神経科学講座

S12-2 レカネマブの効果・副作用、および 18 ヶ月後の継続・中止を考える ～意思決定の観点から～

吉野 祐太 愛媛大学附属病院・精神科

S12-3 アリドネパッチの有用性について考える

伊賀 淳一 愛媛大学大学院精神神経科学講座

S12-4 ブレクスピプラゾールの適応追加と BPSD に対応する向精神薬使用ガイドライン（第 3 版）

馬場 元 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院メンタルクリニック / 順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学

11 月 14 日（金） 08:40 ～ 10:40 第 5 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-2）

シンポジウム 13

[S13] 腸内細菌と精神疾患～研究の最前線から～
The gut microbiota and psychiatric illness ~From the front lines of research~

座長：岸本泰士郎　慶應義塾大学
真田　建史　昭和医科大学精神医学講座

今世紀に入り、精神科領域における腸内細菌叢への関心は世界的な高まりをみせており、我々は 7 年前の本学会シンポジウムから 3 回にわたって、精神科領域における最新の知見をレビューしてきた。具体的には、うつ病・不安症、自閉症スペクトラム障害、双極性障害、過敏性腸症候群等において、消化器内科、心療内科、精神科の立場から腸内細菌叢と各疾患との関連を議論した。しかしながら、我が国における腸内細菌叢を対象とした当領域の研究は未だ進んでいない。今回も、同じテーマをとりあげ、当領域における腸内細菌研究の現況を概説し、本邦における臨床研究（うつ病や自閉症スペクトラム障害、摂食障害を対象とした腸内細菌調査や、気分障害における栄養、腸内細菌に関する検証）の観点から、最新の研究成果を紹介し、今後の展望について議論したい。

S13-1　摂食障害における腸脳相関最前線

酒本　真次　岡山大学学術研究院 医歯薬学域 精神神経病態学

S13-2　うつ病やストレス応答における腸内細菌の役割

功刀　浩　帝京大学医学部 / 国立精神・神経医療研究センター

S13-3　精神疾患における腸内細菌の最新の知見

真田　建史　昭和医科大学精神医学講座

S13-4　うつ病における腸内細菌の最新の知見

廣瀬　俊輔　昭和医科大学医学部精神医学講座

S13-5　最新の研究動向から見えてくる腸内細菌と神経発達症の関係

黒川　駿哉　慶應義塾大学医学部 医科学研究連携推進センター
健康・医療・社会イノベーションセンター

11 月 14 日（金） 13:10 ～ 15:10 第 1 会場（国立京都国際会館 Annex1）

シンポジウム 14

[S14] Can the pan-omics framework illuminate the grand challenge of studying neuropsychiatric illnesses?

座長：宮川　剛　藤田医科大学
Robert McCullumsmith　University of Toledo

オミクス解析は神経精神疾患の複雑な病態解明に重要な手法として期待されている。このシンポジウムでは多様なオミクス的視点からの最新研究を紹介する。McCullumsmith は難治性精神疾患で撹乱される「ダーク・キノーム」を、Boldrini は MDD 患者の海馬におけるマルチオーム単一細胞空間アトラスを紹介し、炎症や転写不安定性を示す。Shukla は各種難治性疾患でのリボソームプロファイル変化「リボソーモーム」とそのタンパク翻訳へのインパクトを、Kunii は統合失調症における遺伝子発現モジュールと多遺伝子リスクスコアの関連を、さらに Miyakawa は神経細胞の過活動が「脱成熟」様の分子発現パターンを誘導しこれが各種精神神経疾患の中間表現型となっていることをそれぞれ報告する。多面的なオミクス研究による知見は神経精神疾患のメカニズム解明に寄与し、新たな治療戦略に道を拓く可能性がある。

S14-1 Ribosome-Mediated Mechanisms in Mood Disorders

Rammohan Shukla　University of Wyoming

S14-2 Stratifying the Pathophysiology of Schizophrenia through Postmortem Brain Omics Analysis

國井　泰人　東北大学災害科学国際研究所 災害精神医学分野 /
福島県立医科大学 医学部 神経精神医学講座

S14-3 Hypothesis-Driven, Multi-Index Evaluation of Transcriptomic Data in Neuropsychiatric Disorders

萩原　英雄　藤田医科大学 医科学研究センター システム医科学研究部門

S14-4 Illuminating the Dark Kinome in Severe Mental Illness and Alzheimer's Dementia

Robert McCullumsmith　University of Toledo

S14-5 Multiomic profiling of human hippocampus cell types in the neurotypical and depressed brain

Maura Boldrini　Columbia University / New York State Psychiatric Institute

11 月 14 日（金） 13:10 ～ 15:10 第 4 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-1）

シンポジウム 15

[S15] 統合失調症死後脳から病因・病態を抽出する

座長：入谷 修司 桶狭間病院藤田こころケアセンター附属脳研究所
鳥居 洋太 名古屋大学医学部附属病院精神科

精神神経疾患の病態解明においては、画像研究や遺伝子検索の進歩がすすんでも、脳試料の検索は必須不可欠である。特に統合失調症などの、いわゆる内因性の精神疾患病因解明はいまだ不明な点が多く、多因子が関わっていることはわかっているが、いまだ突破口をみいだす事ができない。例えば、統合失調症の画像研究では、経過とともに脳萎縮が再現性をもって報告されているが、脳で具体的にどのような機序で起きているかは解明されていない。一方で、統合失調症死後脳研究は、その脳試料については歴史的に欧米のブレインバンクに依拠してきた歴史がある。漸く日本でも精神科ブレインバンクがスタートしている。今回のシンポジウムでは、統合失調症死後脳研究において、病態解明にむけての様々な切り口やアプローチを共有することで病態解明へのブレークスルーを勘案し、かつ精神科ブレインバンクの重要性を確認することを目的とした。

S15-1 ヒト死後脳を使用した細胞種別の発現解析

文東 美紀 熊本大学大学院生命科学研究部

S15-2 統合失調症死後脳におけるタンパク質翻訳後修飾解析の現在

日野 瑞城 東北大学 災害科学国際研究所 災害医学研究部門 災害精神医学分野 /
福島県立医科大学 医学部 神経精神医学講座

S15-3 精神疾患研究におけるヒト死後脳オミクス解析の意義と今後の展望
～ iPS 細胞研究との接点から～

有岡 祐子 名古屋大学医学部附属病院 /
名古屋大学大学院医学系研究科精神疾患病態解明学

S15-4 プロテオグリカン硫酸基供与システムに着目した精神病の分子病態解明の試み

山本 直樹 国際医療福祉大学基礎医学研究センター / 国際医療福祉大学薬学部薬学科 /
東京都立大学大学院理学研究科神経生物学教室

S15-5 精神疾患における髄鞘形成障害 - 死後脳研究と動物モデル研究の統合 -

牧之段 学 熊本大学大学院 生命科学研究部神経精神医学講座 /
藤田医科大学精神・神経病態解明センター変革融合精神医学部門

S15-6 脳からみた統合失調症－精神科ブレインバンクの過去・現在・未来－

入谷 修司 桶狭間病院藤田こころケアセンター附属脳研究所

11 月 14 日（金） 13:10 ～ 15:10 第 5 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-2）

シンポジウム 16

[S16] 研究への患者・市民参画（PPI: Patient and Public Involvement）

座長：糸川 昌成 放送大学
野田 幸裕 名城大学薬学部 病態解析学 I
指定発言：鍋島 俊隆 特定非営利活動法人医薬品適正使用推進機構 (NPO J-DO) / 藤田医科大学

近年、国際的に研究への患者・市民参画（PPI: Patient and Public Involvement）が注目を集めている。PPI では研究のすべての段階で患者・市民が積極的なパートナーとして関わることをさす。これにより、研究の質と患者協働（Patient and Family Engagement）を高めることをめざす。本シンポジウムでは PPI をテーマとして患者家族会の代表、患者家族の研究者、薬剤師、PPI を実践中の医師から発表していただき討論をする。

S16-1 了解の免責―当事者家族がサイエンスに期待するもの―

糸川 昌成 放送大学

S16-2 精神医学研究における患者・市民参画（PPI）の実践と今後の展望：当事者の声から始まる研究へ

尾崎 紀夫 名古屋大学 大学院医学系研究科 精神疾患病態解明学

S16-3 「服薬が見える錠剤シート」の開発を目指して

黒沢 雅広 昭和医科大学烏山病院

S16-4 私たちの病気を研究する上で、私たち抜きにテーマを決めないで。現在までの精神医学研究は、研究者、専門家の視点を中心に行われてきた。これからの精神医学研究は私たちのニーズや家族の気持ちに沿った方向で、原因や仕組みを研究者と共に明らかにして行くことが望ましい。未来の治療法や創薬、予防法について患者共同研究を通して、私たちの腑に落ちる内容の精神医学研究を一緒に進めていきたい。

庄田 洋 品川区精神保健福祉家族会（かもめ会）

11 月 14 日（金） 16:40 ～ 18:40 第 1 会場（国立京都国際会館 Annex1）

シンポジウム 17

[S17] 臨床試験の成功に向けたアカデミックな取り組み - 精神神経疾患領域の経験と課題 -

座長：渡邊衡一郎　杏林大学医学部精神神経科学教室
中林　哲夫　独立行政法人医薬品医療機器総合機構

医薬品等の開発においては、よく計画され適切に実施された臨床試験により、有効性が検証され安全性が示される必要がある。しかしながら、これまでも、有効性が期待できる化合物でも臨床試験で有効性の証明が失敗することが経験されてきた。これは、臨床試験の有効性評価には、試験計画や実施上の課題が影響することがあるためである。このため、適切な臨床試験の実施のためには、有効性評価に影響する要因の検討が重要であり、臨床試験の成功にはアカデミックなノウハウの蓄積が望まれる。既に、有効性評価の影響因子に関すエビデンスも蓄積している。さらには、臨床試験に関するノウハウは、新たなアカデミックな検討課題を認識できる可能性がある。このため本シンポジウムでは、精神神経疾患領域における臨床試験の成功に向けた実施計画や体制を考えるために、臨床開発の現状とこれまでの臨床試験の経験を概観する。

S17-1 わが国における向精神薬の治験を成功させるためのコツ

渡邊衡一郎　杏林大学医学部精神神経科学教室

S17-2 精神神経疾患領域の臨床開発の現状と CTQ 要因

中林　哲夫　独立行政法人医薬品医療機器総合機構

S17-3 臨床試験実施の工夫と学び ―医師主導試験から学んだ創薬・育薬の道―

新津　富央　千葉大学大学院医学研究院精神医学

S17-4 精神神経疾患領域の症例集積力の向上のコツ：COCORO と EGUIDE の経験から

橋本　亮太　国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所

S17-5 精神神経疾患領域における臨床試験の成功に向けた取り組み - 企業の立場から -

小野　浩昭　大塚製薬株式会社

11 月 14 日（金） 16:40 ～ 18:40 第 6 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room F）

シンポジウム 18

[S18] CROSS-Psychiatric Disorder Analysis

座長：沼田 周助 徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野
功刀 浩 帝京大学医学部精神神経科学講座 /
国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部

症候学に基づいた操作的診断分類ではなく、分子生物学的基盤に基づいた精神疾患の構築の可能性について研究発表し議論する

S18-1 メチル化リスクスコアから探る精神疾患のエピジェネティックな共通性と特異性

大井 一高 岐阜大学大学院医学系研究科精神医学

S18-2 双極症・統合失調症・自閉スペクトラム症に共通する遺伝的基盤の解明：大規模ゲノム解析が示す疾患横断的メカニズム

久島 周 名古屋大学

S18-3 髄液バイオマーカーに基づく精神疾患の横断的解析

榎田 嵩子 国立精神・神経医療研究センター メディカル・ゲノム・センター
バイオリソース部

S18-4 精神疾患横断的血漿トリプトファンとキヌレニン濃度の検討

松田 宙也 徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野

S18-5 CROSS-Psychiatric Disorder Analysis - 脳画像と認知機能の立場から -

橋本 直樹 北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室

11 月 14 日（金） 16:40 ～ 18:40 第 7 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room G）

シンポジウム 19

[S19] 不安症（パニック症、強迫症）の診療ガイドライン

座長：稲田　健　北里大学医学部精神神科学
朝倉　聡　北海道大学保健センター

日本神経精神薬理学会と日本不安症学会は、2018 年 3 月に不安症・強迫症診療ガイドライン合同作成委員会を組織し、社交不安症、パニック症、強迫症の診療ガイドライン作成を開始した。今般、パニック症と強迫症の診療ガイドラインを公表するに至ったためシンポジウムを提案する。パニック症、強迫症ともに、薬物療法と精神療法に関する 3 つの clinical question :CQ を定め、それぞれのシステマティック・レビュー（SR）をもとに益（治療反応性、症状改善）と害（治療からの脱落）のバランスを考慮して、完成された。成人（18 歳以上）のパニック症と強迫症に対する標準的ケア（診療）の簡潔なガイドラインであることから、医師を含む医療者と患者、そして患者家族が科学的な根拠（エビデンス）を共有して診療方針を決定する「Shared Decision Making; SDM（共同意思決定）」に役立ててもらうことを目的としている。シンポジウムでは CQ の背景、SR の結果と解釈、推奨と解説を発表していただく。

S19-1 パニック症の診療ガイドライン～背景と CQ 設定の経緯～

塩入　俊樹　岐阜大学大学院医学系研究科精神医学分野

S19-2 「パニック症診療ガイドライン、強迫症診療ガイドラインの作成状況」パニック症の診療ガイドライン ~SR の結果と推奨 ~

高塩　理　東京医科大学八王子医療センター・リエゾンセンター

S19-3 強迫症の診療ガイドライン～背景と CQ 設定の経緯～

松永　寿人　兵庫医科大学医学部精神科神経科学講座

S19-4 強迫症の診療ガイドライン～システマティックレビューの結果と推奨

村山桂太郎　九州大学病院精神科神経科

11 月 14 日（金） 16:40 ～ 18:40 第 8 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room H）

シンポジウム 20

[S20] 脳の発生発達期から見た神経発達症の発症メカニズムの新展開

座長：吉川 貴子 東北大学大学院医学系研究科
内匠 透 神戸大学大学院医学研究科

自閉スペクトラム症等を含む神経発達症の頻度は増加の一途を辿り、将来の働き手の減少にも繋がる重大な社会的問題である。本シンポジウムでは、脳の発生発達期に着目し、神経発達症の新規発症メカニズムに関する最新の研究成果を取り上げる。神経発達症の細胞モデルや動物モデルを用いた脳発達期の病態パスウェイに加え、環境因子が神経発達に及ぼす影響に関する知見を発表する。さらに、神経発達症および外的因子に起因する脳の発達異常と、その予防的介入法に関する新たな成果を紹介する。これらの最先端の研究成果をもとに、神経発達症の病態機構について議論する。

S20-1 神経発達症細胞モデルを用いた脳発達期の病態パスウェイ

内匠 透 神戸大学大学院医学研究科

S20-2 発達期のマイクログリアによる赤血球処理と脳機能への影響

小山 隆太 国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 疾病研究第二部

S20-3 神経発達症モデルにおける神経発達期の性差と次世代エピジェネティック変容

吉川 貴子 東北大学大学院医学系研究科 発生発達神経科学分野

S20-4 発達に伴う脳神経回路の異常からみた自閉スペクトラム症における社会性障害の予防ウインドウ

岡村 和哉 和歌山県立医科大学 神経精神医学教室 /
Department of Psychiatry, Friedman Brain Institute, Icahn School of Medicine at Mount Sinai

S20-5 自閉スペクトラム症を伴う結節性硬化症モデルマウスにおける社会性行動へのペア飼育による影響と DNA メチル化解析

古田島浩子 東京都医学総合研究所臨床医科学研究分野

11 月 15 日（土） 08:40 ～ 10:40 第 1 会場（国立京都国際会館 Annex1）

シンポジウム 21

[S21] BPCNPNP 会員なら知っておきたい精神科 PGx の現在地
- プレシジョンメディスンの根幹を担うゲノムの可能性 -

座長：加藤　正樹　関西医科大学 医学部 精神神経科学講座
池田　匡志　名古屋大学大学院医学系研究科 精神医学
指定発言：岩田　仲生　藤田医科大学 医学部 精神神経科学講座

精神科領域におけるプレシジョンメディスンの実現に向け、薬理遺伝学（PGx）はその中核を成す研究分野でありながら、依然として本学会会員の多くにとっては十分に馴染みのある分野とは言い難い現状があります。本シンポジウムでは、精神科領域における PGx の基礎から最新の研究動向、そして今後本邦において推進すべき課題について、第一線で活躍する研究者が多角的に解説いたします。最後に、藤田医科大学の岩田仲生先生から、国際的な研究動向と比較しながら、日本が世界に遅れを取ることなく PGx 研究を発展させるために必要な体制整備や研究推進の方向性について、提言を含む指定発言をいただきます。本シンポジウムは、PGx に関する基礎的理解を深めつつ、精神科臨床における応用可能性と将来的展望を多面的に議論する貴重な機会となることを目指しております。

S21-1 初心者でもわかる精神科ゲノミクスの基礎
池田　匡志　名古屋大学大学院医学系研究科 精神医学

S21-2 向精神薬副作用の薬理ゲノム学研究
齋藤　竹生　藤田医科大学精神神経科学

S21-3 うつ病の PG x；世界と日本の現状
加藤　正樹　関西医科大学 医学部 精神神経科学講座

11 月 15 日（土） 08:40 ～ 10:40 第 4 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-1）

シンポジウム 22

[S22] 飲酒行動・アルコール依存症の分子・回路研究の新展開

座長：疋田　貴俊　大阪大学蛋白質研究所
佐々木　努　京都大学 大学院農学研究科

アルコール依存症、飲酒関連問題は年々重要性を増している。しかしながら、飲酒行動・アルコール依存症の分子・回路機構は明らかにされておらず、適切な飲酒量を保つメカニズムやアルコール依存症の分子病態に迫る研究が求められている。本シンポジウムでは、松居がマウス飲酒行動のネガティブフィードバック機構、青峰がアルコール依存マウスの脳内分子病態、吉本がヒト飲酒行動、山田がヒト飲酒者の前頭葉機能、高橋はアルコール依存症患者の AMPA 受容体可視化をテーマとした発表を行うことで、ヒトを対象とした研究とマウスを対象とした研究のそれぞれの最前線を紹介、議論をし、アルコール依存症、飲酒関連問題に対する双方向性のトランスレーショナルリサーチへと繋げたい。

S22-1 アルコール摂取行動の恒常性制御機構とその破綻メカニズム

松居　翔　京都大学大学院農学研究科食品生物科学専攻栄養化学分野

S22-2 アルコール消費および耐性を上昇させる核―細胞質間輸送異常

青峰　良淳　大阪大学蛋白質研究所

S22-3 ヒトの飲酒行動の観点から

吉本　尚　筑波大学健幸ライフスタイル開発研究センター /
筑波大学医学医療系地域総合診療医学

S22-4 アルコール依存症ハイリスク者に対する心理社会的介入の効果を予測する客観的指標の開発：事象関連電位に基づく検討

山田　理沙　国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
児童・予防精神医学研究部

S22-5 シナプス生理学のトランスレーショナル　アプローチ

高橋　琢哉　横浜市立大学大学院医学研究科

11 月 15 日（土） 08:40 ～ 10:40 第 5 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-2）

シンポジウム 23

[S23] 抗うつ薬の創薬フロンティア：モノアミン仮説の突破口

座長：竹林　実　熊本大学大学院生命科学研究部附属健康長寿代謝制御研究センター 精神病態医学講座

岩田　正明　鳥取大学医学部精神行動医学分野

1950 年代に偶然発見された三環系抗うつ薬は、モノアミン仮説に基づく創薬の礎を築き、有害事象の軽減と汎用性向上に貢献しましたが、その有効性を超える創薬は依然として課題です。本シンポジウムでは、創薬の歴史と課題を振り返り、「モノアミンの壁」を突破する可能性を持つ 4 つの候補薬に注目します。「抗うつ薬開発の歴史と現状」を住友ファーマの福本健一氏、「ケタミン」を慶応大学の谷英明氏、「抗炎症作用：βヒドロキシ酪酸」を鳥取大学の岩田正明氏、「脂質メディエーター作用：リゾホスファチジン酸受容体 1」を熊本大学の竹林実氏、「精神展開体験作用：サイケデリックス」を慶応大学の内田裕之氏が紹介。抗うつ薬創薬の未来を探り、新たな突破口の発見を目指します。

S23-1 抗うつ薬創薬の変遷と課題克服への展望

福本　健一　住友ファーマ株式会社

S23-2 ケタミンの抗うつ効果：臨床エビデンスと作用機序

谷　英明　慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S23-3 炎症性うつ病への挑戦：β - ヒドロキシ酪酸による新規治療戦略の可能性

岩田　正明　鳥取大学医学部精神行動医学分野

S23-4 抗うつ薬の常識を問い直す：三環系から始まるグリア創薬

竹林　実　熊本大学大学院生命科学研究部附属健康長寿代謝制御研究センター 精神病態医学講座

S23-5 精神展開剤を用いた精神疾患治療の現在地：歴史、現在、社会実装の展望

内田　裕之　慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室

11 月 15 日（土） 08:40 ～ 10:40 第 6 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room F）

シンポジウム 24

[S24] ヒトならではの「こころの病態学」をどう解き明かすか

座長：有岡 祐子 名古屋大学大学院医学系研究科精神疾患病態解明学
西岡 将基 順天堂大学医学部精神医学講座

脳は構造だけでなく、分子・細胞レベルにおいてもヒト特異性が非常に高い臓器である。近年のオミクス技術の進歩により、その特異性が一層明らかになりつつあり、モデル動物では再現できないであろう精神神経疾患の病態が浮上している。これらの課題を克服し、病態解明を進めるためには、ヒト脳の多角的な解析が不可欠である。本シンポジウムでは、「進化」「臨床」「細胞」「組織」という 4 つの視点から、最新のオミクス技術を駆使してヒト脳特有の特性と精神神経疾患の病態に挑む研究者を迎える。各研究者は、それぞれの視点からオミクス技術を用いた解析による最新の知見を提供し、ヒトならではの「こころの病態学」をどこまで明らかにできるのかについて議論する。本シンポジウムは、これらの知見を結集し、新たな研究領域を開拓する貴重な場である。異分野の研究者が集結することで、精神神経疾患の病態解明に向けた新たな方向性を切り拓く場としたい。

S24-1 ヒト脳進化の分子メカニズムと疾患との関係性

鈴木 郁夫 東京大学大学院理学系研究科

S24-2 精神疾患患者 iPS 細胞によりアプローチする、ヒトの「こころの病態」

奥村 啓樹 名古屋大学医学部附属病院薬剤部 /
名古屋大学大学院医学系研究科精神疾患病態解明学

S24-3 空間トランスクリプトーム解析による mTOR オパチーてんかんの細胞分子病態の探索

宮下 聡 国立精神・神経医療研究センター 神経研究所病態生化学研究部

S24-4 ヒト死後脳を用いたシングルセル解析による双極性障害責任細胞種の探索

西岡 将基 順天堂大学医学部精神医学講座 / 順天堂大学医学部気分障害分子病態学講座

11 月 15 日（土） 08:40 ～ 10:40 第 7 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room G）

シンポジウム 25

[S25] プログラム医療機器の研究開発と社会実装の実際 ～精神疾患のアンメット・メディカル・ニーズの克服を目指して～

座長：小居　秀紀　杏林大学医学部付属病院
池田　浩治　東北大学病院 臨床研究推進センター
指定発言：中込　和幸　国立精神・神経医療研究センター

2023 年 9 月に、経済産業省と厚生労働省は、最先端のプログラム医療機器（SaMD: Software as a medical device）の実用化を促進する施策として「プログラム医療機器実用化促進パッケージ戦略 2（DASH for SaMD 2）」を公表した。その後、2023 年 11 月には「プログラム医療機器の特性を踏まえた二段階承認に係る取扱いについて」が、2024 年 6 月には「プログラム医療機器の特性を踏まえた 適切かつ迅速な承認及び開発のためのガイダンス（第二版）」が厚生労働省医薬局医療機器審査管理課から発出された。また、経済産業省、厚生労働省、AMED の共催にて、SaMD に関する萌芽的シーズの把握や開発における考え方の整理に関する課題と解決に向けて産官学で意見交換を行うために、「SaMD 産学官連携フォーラム」やそのサブフォーラムも定期的に開催されている。本セッションでは、規制当局、アカデミア、プログラム医療機器に係る研究者のそれぞれの立場から、プログラム医療機器の研究開発と社会実装の現状と課題、今後の方向性について議論する。

S25-1 プログラム医療機器に係る行政の取り組み
野村由美子　厚生労働省医薬局医療機器審査管理課

S25-2 疾病治療用プログラム医療機器における審査上の論点
小池　和央　独立行政法人医薬品医療機器総合機構 プログラム医療機器審査部

S25-3 デジタル技術による持続可能な医療
上野　太郎　サスメド株式会社

S25-4 強迫症のアンメット・メディカルニーズと SaMD への期待と展望
向井馨一郎　兵庫医科大学精神科神経科学講座

11 月 15 日（土） 08:40 ～ 10:40 第 8 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room H）

シンポジウム 26 EGUIDE 企画

[S26] ガイドライン一致率を用いた診療ガイドラインの社会実装

座長：稲田 健 北里大学医学部精神神科学
清水 善仁 金沢医科大学病院 薬剤部
指定発言：中川 伸 山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座
当事者の方

日本神経精神薬理学会、日本臨床精神神経薬理学会は統合失調症薬物治療ガイドラインを公表し、普及活動を行っている。また、医療の質を改善するためには、診療ガイドラインの提示するエビデンスと実際の医療との乖離を明らかにし、乖離を埋める医療を実践することが有用とされる。そこで、診療ガイドラインの推奨する処方と現在の処方がどの程度一致しているのかを明らかにすることは、診療ガイドラインの社会実装につながると考えられるため、一致率を大まかに評価するガイドライン一致率を作成した。本シンポジウムでは、ガイドライン一致率を紹介し、ガイドライン一致率の日常臨床における活用方法を紹介し、診療ガイドラインの社会実装にどのように役立つかを示し、議論を行いたい。

S26-1 ガイドライン一致率とはなにか？

福本健太郎 岩手医科大学医学部 神経精神科学講座

S26-2 ガイドライン一致率の日常診療における利用法について

村岡 寛之 北里大学医学部精神科学

S26-3 ガイドライン一致率を活用した処方整理支援と薬剤師の関与

井手 健太 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 精神疾患病態研究部 / 産業医科大学病院 薬剤部

S26-4 統合失調症におけるガイドライン一致率の病態研究への応用

大井 一高 岐阜大学大学院医学系研究科精神医学

11 月 15 日（土） 13:10 ～ 15:10 第 1 会場（国立京都国際会館 Annex1）

シンポジウム 27

[S27] ストレス応答ダイナミクスの多層的理解

座長：古屋敷智之　東京科学大学大学院医歯学総合研究科薬理学分野
内田　周作　東京科学大学総合研究院難治疾患研究所

ストレス応答の理解と対処は、現代の公衆衛生上の重要課題である。ストレス応答は、遺伝環境相互作用、睡眠、炎症など多様な影響を受けながら、分子・神経・症状など多層的なレベルで複雑なダイナミクスを示すことが明らかとなってきているが、メカニズム全体の包括的な理解には至っていない。本シンポジウムでは、ストレス応答についてそれぞれの立場から先駆的な研究を行っている演者たちが、これまでの研究を紹介し、多角的に議論する。ヒトの臨床・理論研究として、長峯は PTSD 症状の長期的変化を、千葉は病態モデルに基づく横断・短期的ストレス症状のダイナミクスを紹介する。また、動物モデルや分子といった基礎研究の視点から、林は睡眠・覚醒、古屋敷は炎症、内田は遺伝環境相互作用に基づくストレス応答のダイナミクスを紹介する。臨床・基礎・理論の融合は包括的な理解を促進し、ストレス応答を制御する手法の創出につながると期待される。

S27-1 ストレス関連脳病態を生み出す神経・免疫・代謝連関

古屋敷智之　東京科学大学大学院医歯学総合研究科薬理学分野

S27-2 睡眠異常と精神神経疾患の双方向性の関係性解明へ向けたマウス研究

林　悠　東京大学大学院理学系研究科 /
筑波大学高等研究院（TIAR）国際統合睡眠医科学研究機構（WPI-IIIS）

S27-3 ストレスによる行動変容の多様性を創発する脳内メカニズム

内田　周作　東京科学大学総合研究院難治疾患研究所

S27-4 ヒトのストレス症状の長期的ダイナミクス

長峯　正典　防衛医科大学校 防衛医学研究センター 行動科学研究部門

S27-5 ストレス症状のダイナミクスと状態依存的な介入に向けた取り組み：PTSD における不均一性の構造と脳内機構の検討

千葉　俊周　国際電気通信基礎技術研究所 行動変容研究室

11 月 15 日（土） 13:10 ～ 15:10 第 2 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room D）

シンポジウム 28

[S28] 病態に基づく精神疾患の診断方法と治療法開発の最前線

座長：松本 純弥 国立精神・神経医療研究センター
鬼塚 俊明 国立病院機構榊原病院
指定発言：夏苅 郁子 やきつべの径診療所
神庭 重信 九州大学名誉教授

精神科診断は症状に基づく操作的診断基準に依っていて、従来の診断別の治療は一定の効果を得ている。しかし従来の治療に反応しない治療抵抗性の患者群に新たな治療方法を届けるには、病態に基づく精神疾患の診断に対して、病態に基づいた治療法を開発する方法が求められる。そこで、本シンポジウムでは、病態生理や分子メカニズムに基づいた精神疾患の診断方法と治療法開発について議論する。具体的には、従来の精神疾患の診断の課題、精神疾患のゲノム研究に基づく診断・治療、側脳室拡大と認知機能障害がある精神疾患患者の診断と治療法開発、精神病の自己免疫病態から見た診断と治療、エクソソーム病態に基づく診断・治療について報告する。本シンポジウムを通じて、最新の研究成果の診断への応用と、治療法開発の実現可能性について議論する。

S28-1 現代精神医学における診断課題と研究戦略

杉原 玄一 東京科学大学精神行動医科学分野

S28-2 遺伝学に基づく精神疾患の診断と治療法開発

木村 大樹 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学分野

S28-3 側脳室拡大と認知機能障害がある精神疾患患者の診断と治療法開発

松本 純弥 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

S28-4 神経系自己抗体から見る精神疾患の診断と治療

塩飽 裕紀 東京科学大学大学院 精神行動医科学分野

S28-5 エクソソームによって精神疾患を理解する試み

牧之段 学 熊本大学大学院 生命科学研究部神経精神医学講座 /
藤田医科大学精神・神経病態解明センター変革融合精神医学部門

11 月 15 日（土） 13:10 ～ 15:10 第 4 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room C-1）

シンポジウム 29

[S29] 向精神薬と自動車運転
―エビデンスの社会実装のためにアカデミア・行政・企業に求められる役割―

座長：尾崎 紀夫 名古屋大学 大学院医学系研究科 精神疾患病態解明学
松尾 幸治 埼玉医科大学医学部精神医学

本邦における向精神薬の添付文書では、副作用の少ない標準治療薬であっても一律に運転禁止が規定されている。一方、欧米では一律の運転禁止ではなく、医療者と患者とのリスクコミュニケーションが交通事故防止において重要視されている。このような状況を踏まえ、厚生労働省より「向精神薬が自動車の運転技能に及ぼす影響の評価方法に関するガイドライン」が通知され、その影響の程度を判定する基準も確立された。さらに、運転シミュレータを用いた評価系も開発され、新薬と既承認薬の影響を評価する基盤が本邦でも整備された。今後、添付文書改訂の実現化が見込まれる中、その事後対応も重要な課題として検討する必要がある。本シンポジウムでは、ガイドラインと判定基準について概説し、製薬企業の対応や経験を紹介するとともに、今後期待されるリスクコミュニケーションと薬剤指導についても議論する。

S29-1 新規運転評価系と運転技能影響評価ガイドラインの臨床応用

岩本 邦弘 名古屋大学大学院医学系研究科 発達老年精神医学分野

S29-2 自動車の運転技能に及ぼす影響の評価と判定基準について
―向精神薬のプロファイル評価―

中林 哲夫 独立行政法人医薬品医療機器総合機構

S29-3 企業の取り組み：医薬品が自動車運転技能に与える影響を評価する臨床試験の実施

神辺 太樹 大正製薬株式会社 医薬開発本部

S29-4 自動車運転に関するリスクコミュニケーション
～てんかん診療における実践～

渡邊さつき 埼玉医科大学病院

S29-5 向精神薬服用患者の運転に対する薬剤師のリスクコミュニケーションの在り方を考察する

肥田 裕丈 名古屋大学医学部附属病院 薬剤部 / 名城大学薬学部 病態解析学 I

11 月 15 日（土） 13:10 ～ 15:10 第 6 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room F）

シンポジウム 30

[S30] 就労に最適な精神科薬物療法を考える

座長：坪井 貴嗣 杏林大学医学部精神神経科学教室
堀 輝 福岡大学医学部精神医学教室
指定発言：阿竹 聖和 NTT 西日本 総務人事部 労務厚生部門 健康経営推進室

本シンポジウムは、統合失調症、うつ病、双極症、注意欠如多動症（ADHD）の 4 つの精神疾患を対象に、当事者の復職や就労における精神科薬物療法の役割について検討したいと考え、企画させていただきます。薬物療法は、症状の改善を通じて就労を促進する一方で、副作用による作業能力の低下を防ぐことも重要です。本シンポジウムでは、各疾患における就労と薬物療法に関する最新の知見や課題についてそれぞれの専門家に講演いただきます。さらには、専属産業医の視点からの意見を交え、効果的なメンタルヘルス支援の在り方について議論できればと思っております。本企画は日本医師会認定産業医制度の更新単位対象セッションとして認定を受けており、就労に関わる多くの方々に、職場における精神疾患患者支援の実践に有益な情報を提供し、産業メンタルヘルスの更なる充実を目指したいと考えています。

S30-1 統合失調症における「働くための薬物療法」：非鎮静系薬剤・LAI・処方整理による認知機能改善へのアプローチ

小口 芳世 聖マリアンナ医科大学神経精神科学教室

S30-2 双極症の就労に最適な精神科薬物療法を考える

高江洲義和 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座

S30-3 就労中のうつ病患者に適切な薬物療法とは

松本 泰幸 杏林大学医学部精神神経科学教室

S30-4 神経発達症の就労を支える薬物療法

太田 晴久 昭和医科大学発達障害医療研究所

11 月 15 日（土） 13:10 ～ 15:10 第 7 会場（国立京都国際会館 本館 1F Room G）

シンポジウム 31

[S31] 炎症と免疫から考え直す精神疾患

座長：吉村 玲児 産業医科大学医学部精神医学講座
臼井 紀好 大阪大学大学院医学系研究科 / 大阪大学大学院連合小児発達学研究科

精神疾患の病態は、これまで主に神経伝達物質の異常や遺伝的要因が注目されてきた。しかし近年、炎症や免疫の異常が精神疾患の発症や進展に関与している可能性が指摘されている。たとえば、うつ病や統合失調症では慢性炎症マーカーの上昇が観察されており、抗炎症薬の併用が症状の改善に寄与する可能性も示されている。本シンポジウムでは、精神疾患における炎症と免疫の関与についての最新知見を共有し、それが診断や治療にどのように応用可能であるかを検討する。精神疾患の新たな理解と治療法の構築に向けて、炎症と免疫という視点の重要性を再考する場としたい。

S31-1 うつ病の病態モデルとしての NPSLE

吉村 玲児 産業医科大学医学部精神医学講座

S31-2 自閉スペクトラム症の病態形成における母体免疫応答と炎症

臼井 紀好 大阪大学大学院医学系研究科 / 大阪大学大学院連合小児発達学研究科

S31-3 糖化・栄養ストレスが誘導する神経炎症と精神疾患病態

鳥海 和也 東京都医学総合研究所 臨床医科学研究分野 統合失調症プロジェクト

S31-4 PTSD と炎症

堀 弘明 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部

S31-5 好中球由来炎症因子に着目したうつ病の新規病態機序と治療標的の可能性

國澤 和生 藤田医科大学 大学院医療科学研究科 レギュラトリーサイエンス分野 / 藤田医科大学 精神神経病態解明センター (ICBS) / NPO 法人 医薬品適正使用推進機構